Research Monograph Series

矛盾の共存在と並列的現実の生成論
離散・分散、ネオテニー、対象化、曼荼羅・阿字観を通じた位相変態

The Generative Theory of Contradictory Co-Being and the Parallel Structure of Reality:
Topological Metamorphosis through Discreteness, Dispersion, Neoteny, Objectification, Mandala, and Ajikan

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Generative Theory of Contradictory Co-Being and the Parallel Structure of Reality: Topological Metamorphosis through Discreteness, Dispersion, Neoteny, Objectification, Mandala, and Ajikan

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、論理的には両立しないものが現実には隣接し、並列し、相互に作用しながら持続するという事実を、生成の位相存在論の立場から「矛盾の共存在」として定式化する。近代的認識は、対象を同定し、因果を系列化し、矛盾を排除することによって、検証可能な知と行為可能な世界を形成してきた。しかし現実は直列的であるだけでなく並列的でもあり、自己と自己以外、必然と偶然、愛と憎しみ、生と死、形と意味、局所と全体は、単一の解へ統合されないまま同じ現在に作用する。本論文は、思考を主として直列化の働き、感性を主として並列的受容の働きとして区別しつつ、両者を固定的二元論へ還元しない。「感じながら思考し、思考しながら感じる」ことを、感性と思考が差異を保ったまま相互に変容する生成的認識として位置づける。

さらに本論文は、「離散」を共通の位相と演算規則の内部に分かれて配置された差異、「分散」を相互に還元できない複数の位相が共通の終局的解を持たずに共在する状態として操作的に定義する。この区別を通じて、現代社会が多様性を増大させながら、実際には差異を同一の評価面へ直列化している構造を批判する。科学そのもの、法、数理、ポリティカル・コレクトネス、グローバルな規範は共存在を可能にする重要な条件である。しかし、それらが個別具体的な身体、土地、履歴、沈黙、翻訳不能性を唯一の一般抽象的尺度へ変換するとき、現実へ接続するインターフェイスは、現実そのものとして崇拝されるフェティッシュへ転化する。

本論文は、人間のネオテニーを、特定の認知能力を直接説明する確定的因果としてではなく、発達上の可塑性と意味の未決定性を長く保持する生物学的条件として参照する。落ちた枝が枝のまま棒や道具になる出来事には、物質的同一性の保持と関係的同一性の変態が同時に生じる。道具と芸術は、現前する形と未現実の意味を並列的に保持し、異なる位相を接続する能力から分岐したものとして比較される。ラスコー洞窟壁画はこの能力の起源と断定されるのではなく、壁面、身体、動物、記憶、不可視の世界が一つの界面において共在する成熟した事例として扱われる。

最後に、真言密教の曼荼羅と阿字観を、局所を全体へ閉じる偶像ではなく、局所から非閉鎖的全体を現成させる身体的インターフェイスとして再解釈する。対象化は一つの局所へ輪郭を与えると同時に、それと整合する自己と世界全体を生成する。阿字観は、阿字を固定した対象として所有するのではなく、形、音、呼吸、身体、意識、世界が並列的に作用する現在を生成し、主体と対象の固定された境界を可動化する。本論文の結論は、矛盾を解消することだけが知ではなく、矛盾する位相を相互に還元せず接続可能なまま保持することが、共存在、芸術、文化、人間の生成力を回復する原理である、というものである。

キーワード

生成学、生成の位相存在論、共存在、矛盾、並列性、直列性、離散、分散、ネオテニー、対象化、知的位相ロック、感性的位相ロック、位相変態、フェティッシュ、曼荼羅、阿字観、即、インターフェイス芸術

目次

Contents

方法論的序論.....1

1 問題設定 論理における不可能と現実における共在.....2

2 直列的現実と並列的現実.....3

3 離散と分散.....4

4 矛盾を解く知から、矛盾を担う知へ.....5

5 対象化、アウトライン、世界生成 6

6 一般抽象的普遍性と個別具体的普遍性.....7

7 ホワイト社会と直列的純化.....8

8 フェティッシュ、偶像、インターフェイス 9

9 ネオテニーと未決定性を保持する成熟.....10

10 枝から道具へ 同一性を保持した位相変態.....11

11 道具と芸術の分岐、ラスコー洞窟.....12

12 曼荼羅 差異を消さない全体.....13

13 阿字観 局所から全体を生成する身体的インターフェイス.....14

14 生成の位相存在論における定式化.....15

15 芸術と現代的実践.....16

結論 17

参考文献.....18

方法論的声明.....20

方法論的序論

本論文は、数学、計算機科学、発生生物学、先史考古学および仏教学の個別理論を、生成の位相存在論によって代替するものではない。本論文における「位相」は、数学的位相空間の厳密な形式を直接意味せず、ある存在が何と接続可能であり、どの差異を保持し、どの境界を通過できるかを記述する存在論的概念である。「離散」と「分散」も標準的数学用語の再定義ではなく、共通尺度内の差異と、尺度そのものが異なる複数の現実とを区別するための操作概念である。

また、ネオテニーから象徴能力、道具、芸術が単線的に生じたと主張するものでもない。人間の前頭前野を含む脳発達の一部に、他の霊長類と比較した発達遅延が認められるという研究は存在するが、その遅延から特定の文化能力を直接導くことはできない（Somel et al. 2009）。本論文が提示するのは、発達上の未決定性を保持することと、一つの形に複数の可能性を並列的に感じることとの構造的対応である。したがって以下の議論は、生物学的証明ではなく、経験科学に反しない範囲で構成される存在論的・美学的仮説である。

真言密教についても同様である。本論文は阿字観や曼荼羅の教理史を総括する仏教学研究ではない。「阿字本不生」、大日如来、両界曼荼羅、即身成仏などの密教概念を尊重しつつ、それらを美学者母が展開してきた生成学、すなわち生成の位相存在論、自己外部化、インターフェイス存在論、人間以前性と自己以前性、即、座・席・位、無名性、作品性、言語デリバティブ論、二つの普遍性の循環へ接続する比較哲学的試論である。

1　問題設定　論理における不可能と現実における共在

古典論理において、同一の条件と同一の意味のもとで、ある命題とその否定がともに真であることは許されない。矛盾律は推論の識別力を保つために不可欠であり、矛盾から任意の命題を導ける体系では、真偽の区別が失われる。本論文は、この論理的原則を否定しない。

しかし、現実において経験される矛盾は、必ずしも一つの形式体系内部の命題的矛盾ではない。ある出来事が一人には救済であり、別の者には暴力であること、同じ人を愛しながら憎むこと、生きる希望が死の自覚と同時に強まることは、それぞれ異なる身体、履歴、関係、時間が同じ現在へ作用することから生じる。形式論理によって条件を添字化すれば矛盾は整理できるが、現実の力は、整理以前に複数の位相が同じ身体と場所へ作用してしまうことにある。

したがって本論文がいう矛盾とは、論理的誤謬の称揚ではない。それは、単一の位相へ還元できない複数の現実が、互いに排他的な要求を保ったまま接触する生成的緊張である。差が関係の外部に分離されているだけなら、そこに力は生じない。差が互いを消せず、しかも切断もできないとき、その差は矛盾として力を持つ。

生成の位相存在論では、存在は孤立した実体ではなく接続可能性であり、関係は実体に先行する。ゆえに矛盾は、完成した二者のあいだに後から生じる事故ではない。相互に還元不能なものが接触すること自体が、存在生成の条件である。共存在とは、この接触を調和へ解消することではなく、差異を保った接続が持続できる現在を生成することである。

2　直列的現実と並列的現実

現実は直列的である。出来事は時間をもち、行為には順序があり、過去の結果は現在の条件となる。身体は同じ瞬間に無限の行為を実行できず、選択は可能性を限定する。因果、論証、手続、記憶、責任は、この直列性なしには成立しない。

同時に、現実は並列的である。同じ現在に、複数の身体、感覚、場所、記憶、制度、生命、死者の痕跡、未来への予期が存在する。それらは一つの中心から完全に把握されず、同じ速度で進まず、同じ因果系列にも属さない。それでも、それぞれは互いの条件を変化させる。

思考は主として、この過剰な並列性から差異を選び、順序づけ、因果と意味の系列を形成する。感性は主として、まだ一つの系列へ整理されていない複数の作用を同時に受け取る。ただし、思考が常に直列で感性が常に並列なのではない。数学的思考も複数の構造を同時に保持でき、感情も習慣的な物語へ直列化されうる。両者の差は能力の本質ではなく、接続の傾向にある。

直列化は現実を理解し、継承し、行為へ変えるために必要である。問題は、直列化された説明を現実の全体と取り違えるときに生じる。原因から結果へ、属性から評価へ、違反から処分へ、入力から出力へという系列だけが現実とみなされると、系列に入らない他者、偶然、身体、沈黙、場所、翻訳不能性はノイズとして除去される。現在の閉塞は、直列性そのものではなく、その絶対化にある。

3　離散と分散

本論文は「離散」と「分散」を次のように区別する。離散とは、複数の要素が互いに分かれていながら、同じ座標、規則、問題設定、比較尺度を共有している状態である。離散した要素には距離があるが、その距離は同じ体系の内部で測定できる。したがって離散には、分類、演算、選択、最適化および解が原理的に成立する。

分散とは、要素が空間的に散らばることだけではない。それぞれが異なる身体、尺度、時間、因果、価値および現実条件に属し、それらすべてを完全に包摂する最終的座標が存在しない状態である。分散したもののあいだにも翻訳と判断は可能である。しかし、その翻訳は残余を生み、判断はつねに特定の位相から行われる。

したがって「分散には答えがない」とは、何も決定できないという意味ではない。それは、すべての位相を同時に完結させる単一の終局的解がないという意味である。離散には共通の問題に対する複数の候補がある。分散には、何が問題であるかについても複数の位相がある。

この区別によって、多様性の二つの形が見えてくる。同一のプラットフォーム、貨幣、法、言語、評価指標の上に多数の選択肢が並ぶ状態は、差異が豊富であっても離散である。それに対して、異なる土地、身体、記憶、宗教、生活形式が、完全には交換可能にならずに関係する状態は分散である。共存在が必要とするのは、離散的多様性の増殖だけでなく、異なる位相が異なるまま接続する分散的複数性である。

4　矛盾を解く知から、矛盾を担う知へ

知は長く、矛盾を発見し、分類し、除去する能力によって強さを得てきた。この能力は科学、法、技術、公共的議論に不可欠である。しかし、現実における矛盾が複数位相の接触から生じるならば、すべての矛盾を誤りへ還元する知は、現実の一部を切断する。

生成学における知とは、矛盾を永久に未解決のまま放置することでも、真偽判断を停止することでもない。矛盾の各項がどの位相から生じ、どの身体と履歴を持ち、どのような力を相互に及ぼしているかを記述し、その関係を新しい形、概念、制度、行為へ一時的に変換することである。解は終点ではなく、次の修正へ開かれた局所的安定、すなわち「納まり」である。

ここで「感じながら思考し、思考しながら感じる」という命題が重要になる。これは感性を思考の資料にし、思考の結論に感情を付加することではない。感じることによって何が問題であるかが変化し、思考することによって何を感じうるかが変化する相互生成である。

感性と思考は統合されて同一になるのではない。感性は概念に回収されない残余を保持し、思考は感性を反復可能な形へ分節する。両者の差が消えないからこそ、知は現実へ開かれ続ける。知とは矛盾を消去した体系ではなく、矛盾の力を引き受け、自己の位相を変化させるインターフェイスである。

5　対象化、アウトライン、世界生成

人間は、連続する現実の一部にアウトラインを与え、それを「何か」として対象化する。対象化によって、形には名称、機能、価値、因果的位置が与えられる。しかし輪郭は対象だけを作るのではない。輪郭の外側を背景として組織し、それを見る主体の位置を定め、何が可能な行為であるかを決定する。

森に落ちたものを「枝」と呼ぶとき、それは木、地面、腐敗、季節の循環に属する。そこに「棒」という輪郭を見いだすとき、身体は握る者となり、周囲は、叩く、掘る、手の届かない場所に届くといった行為の場として再編される。一つの局所の意味が変わることによって、それと整合する世界全体が変化する。

したがって対象化は、外部世界を受動的に写す操作ではない。それは対象、自己、背景、行為、時間を同時に組織する世界生成である。対象を固定することは、その対象と整合する位相を固定することでもある。対象の局所的固定が、自己の位置と世界全体の接続可能性を閉じるとき、知的位相ロックが生じる。

ただし、局所化そのものは否定されない。身体はつねに局所から世界に接続する。問題は、局所が関係から切断され、全体を代理し尽くすときである。生成的局所化は、接続のための焦点を作る。局所的固定は、その焦点を現実そのものとして閉じる。

6　一般抽象的普遍性と個別具体的普遍性

対象化と直列化は、複数の個別から共通性を抽出し、場所と身体を越えて適用可能な一般抽象的普遍性を形成する。科学的法則、法的原則、数理的形式、公共的規範は、この普遍性によって、身内的な恣意や局所的暴力を批判する力を持つ。

しかし普遍性は一般抽象性だけから生じない。獣道は、個々の身体の通過が土地へ印を残し、その印が後続する身体へ可能性を開くことから生じる。そこでは一回的な接触が交換不能性を保ちながら、自己以外へ通行可能性を渡す。この普遍性を個別具体的普遍性と呼ぶ。

二つの普遍性は排他的ではない。個別具体的な印がなければ抽象化は始まらず、一般抽象的な型がなければ、個別の経験を比較し、検証し、遠くへ継承することは困難である。問題は、抽象が自らを生んだ接触の印を忘れ、個別へ一方向的に適用されるときに起こる。

科学的普遍性は文化的基礎を持つから無効なのではない。証拠、再現、反証、公開性によって局所的偏見を越える力を持つ。しかし、その証拠をデータとして残す装置、再現を可能にする型、批判を支える倫理、研究者が席を占める制度は文化的に生成される。科学主義とは、科学的方法の厳密さではなく、その生成条件を消去して一般抽象的普遍性を唯一の実在基準とする忘却である。

7　ホワイト社会と直列的純化

本論文が「ホワイト社会」と呼ぶのは、暴力、差別、曖昧さ、身体性、汚れ、矛盾を、可視的な表面から除去し、透明で説明可能な状態を正しさと同一視する社会的傾向である。これは特定の政策や立場を一括して非難する名称ではなく、現実を記号的整合性へ純化する構造の記述である。

ポリティカル・コレクトネス、法的権利、国際的規範は、閉じた共同体の内部で沈黙させられてきた者に言葉と保護を与え、共存在の最低条件を形成しうる。身内的・土着的感性もまた、親密さの裏側で外部者、女性、少数者、異端を排除してきた。したがって、ローカルな感性を善、普遍的規範を悪とする回帰主義は採用できない。

批判されるのは、共存在を守る規範が、自らを唯一の正しい語彙と手続へ閉じる転化である。具体的な身体、文脈、沈黙、関係の継続可能性を見る前に、発言が分類され、分類から評価が導かれ、評価から処分が直列的に生じるとき、矛盾を抱えながら関係を変化させる時間が失われる。

グローバルな接続にも同じ二面性がある。それは異なる位相の出会いを拡大する一方、貨幣、英語、法、指標、プラットフォームへ翻訳できる差異だけを流通させることがある。このとき世界は多様化して見えるが、実際には同一位相内の離散が増殖する。分散的な共存在は、多様性の表示ではなく、翻訳不能な残余が関係の内部に留まることを必要とする。

8　フェティッシュ、偶像、インターフェイス

フェティッシュは、特定の物や形に強度が凝縮することそれ自体ではない。局所化は、注意、欲望、記憶、神聖性、作品性を成立させる。色気もまた、未特定の未来と他者の参与可能性が一つの形へ局所化されることから生じる。

フェティシズムが成立するのは、その強度を生成した関係が忘却され、形が力を自己所有しているとみなされるときである。価格が価値そのもの、数値が現実そのもの、正しい語が正義そのもの、像が神聖そのものとして扱われると、インターフェイスは偶像へ転化する。

したがって偶像崇拝とは、像を持つこと一般ではない。非局所的で関係的な力を一つの局所へ閉じ、その局所を全体の終点として崇拝することである。言語、法、論理、数理も、本来は現実への接続を開くインターフェイスである。しかし、それらに適合する現実だけが存在を許されるとき、一般抽象的普遍性は究極のフェティッシュとなる。

反対に、局所が自らの外部を保持し、形の内部に空席を残すならば、局所は世界へ開く。作品性は完成による閉鎖ではなく、形が自己以外を呼び込みながら、なお一つの形として現実に接地する強度である。色気とは、局所が全体を所有する力ではなく、局所から未現実の関係が感じられる力である。

9　ネオテニーと未決定性を保持する成熟

ネオテニーは、生物学的には祖先的な幼若形質が成体まで保持される異時性の一形態を指す。人間については、身体全体を一括して幼形成熟とみなす単純な説には異論がある一方、脳の遺伝子発現を含む一部の発達過程が他の霊長類より遅延することが示されている（Somel et al. 2009）。

生成学は、この発達遅延を人間文化の唯一の原因としない。それを、環境、他者、言語、道具との関係によって自己の位相を長く変えうる可塑性の条件として読む。ここで重要なのは、幼児性の保存ではなく、形と意味の結合を早急に一つへ固定しない能力である。

子どもの遊びでは、枝は現実の枝でありながら、剣、杖、動物、境界にもなる。これは現実と虚構を区別できない状態ではない。現実の物質性と仮構された機能を、異なる位相として同時に保持し、そのあいだを往還する能力である。

この観点から成熟を再定義できる。成熟とは、曖昧さをすべて除去して一つの自己へ完成することではない。複数の可能性を感じながら一つを行為として選び、その選択後も別の位相への接続可能性を失わないことである。ネオテニー的成熟とは、完成によって閉じない成熟である。

10　枝から道具へ　同一性を保持した位相変態

森に落ちている枝が棒という道具になるとき、物質としての枝はほとんど変化しない。それにもかかわらず、人間の身体との関係が変わることで、存在の機能的位相が変化する。枝は枝であり続けながら、枝ではなかったものになる。

これは論理的同一律の単純な破壊ではない。「植物由来の物体としての枝」と「身体との関係における道具」は異なる述語と条件に属する。しかし生成の出来事において重要なのは、同じ物が複数の位相を同時に担い、その関係変更が自己と環境の双方を再編することである。本論文はこれを位相変態と呼ぶ。

道具の生成は、形態の知覚、身体的アフォーダンス、記憶、予期、模倣、社会的継承を含む。複合道具の製作はさらに、複数の材料と工程を時間的に組織する能力を必要とする。南アフリカ中期石器時代の複合接着剤に関する実験考古学は、その製作が物質変化の理解、多段階操作、抽象的思考を必要とした可能性を示す（Wadley, Hodgskiss, and Grant 2009）。ただし、実用的複雑性をただちに象徴能力と同一視することはできない。

枝から棒への変態が示す原理は、自己にも当てはまる。自己は同じ身体と履歴を保ちながら、他者、場所、作品との接触によって別の自己となる。生成とは、以前の同一性を消去する交替ではなく、同一性の内部へ還元不能な差が入り、接続可能性の全体が変わることである。

11　道具と芸術の分岐、ラスコー洞窟

道具と芸術を一つの起源や機能へ還元することはできない。しかし両者は、現前する形と、その形がまだ持っていない意味または作用とを並列的に保持する能力という観点から比較できる。道具は形を身体的作用へ接続し、芸術は形を不可視の関係、記憶、未来、死者、他者へ接続する。

ラスコー洞窟は芸術の最初の発生点ではなく、旧石器時代の多様な造形実践の一例である。また、その図像の目的を狩猟呪術、宗教、教育、記録のいずれか一つへ断定することもできない。重要なのは、壁面が単なる支持体ではなく、洞窟の闇、移動する身体、光、音、動物像、記憶が接触する界面となる構造である。ヴェゼール渓谷の洞窟群とラスコー壁画が持つ考古学的・人類学的・美学的重要性は広く認められている（UNESCO World Heritage Centre n.d.）。

壁は壁のまま、動物が現れる場になる。像は動物そのものではないが、単なる偽物でもない。物質的表面と不在の動物、現在の身体と異なる時間が、差異を保ったまま同じ場所へ作用する。この構造は、芸術を表象の正確さではなく、複数位相の共存在を生成するインターフェイスとして理解させる。

したがって芸術の創発とは、虚構によって現実を離れることではない。現実にすでに含まれながら、一つの実用的・因果的系列には現れていなかった接続を、形へ局所化することである。芸術は答えを表示するのではなく、現実が一つの答えに閉じないことを身体的に経験させる。

12　曼荼羅　差異を消さない全体

真言密教の曼荼羅は、世界を外部から縮小して一覧化する地図に尽きない。諸仏、菩薩、明王などの異なる形と働きが、相互の差異を消さず、大日如来の世界を現成する。曼荼羅は教理の表象であると同時に、修行者の身体、視線、声、行為を配置し直す実践的装置である（Hakeda 1972; Yamasaki 1988; Abe 1999）。

ここで全体は、すべての局所を同一化する上位の一者ではない。それぞれの局所が、他の局所との関係を通じて全体を現す。局所は全体の交換可能な断片ではなく、全体がその場所において現成する「位」である。

この意味で曼荼羅は、分散を離散へ変換する図ではない。異なる位相を一つの平面へ置きながら、それらの働きと位置の差を保持する。中心も単なる支配点ではなく、諸関係が中心性を生成し返す場として理解できる。これは密教教理の歴史的意味を生成学へ同一化する主張ではなく、その構造を共存在論として読む比較哲学的解釈である。

曼荼羅が偶像と異なるのは、像があるからでも、像がないからでもない。像がそれ自体で閉じず、身体的実践を通して別の局所、全体、自己以外との接続を開くからである。曼荼羅は全体を所有させるのではなく、自己がすでに全体の関係内部にあることを経験させる。

13　阿字観　局所から全体を生成する身体的インターフェイス

阿字観は、梵字の阿、月輪、蓮華などを観想の焦点とする真言密教の実践である。阿字はきわめて限定された局所であるが、「阿字本不生」が示すように、独立した実体の起源を固定する記号ではない。形、音、呼吸、身体、意識、世界の相互関係を開く種字として働く。

観想の出発点では、「私が阿字を見る」という主体・作用・対象の直列的構造がある。しかし実践においては、見る身体、呼吸、発声、阿字の形、月輪、周囲の空間が同じ現在に作用する。自己と対象は消滅して一つになるのではなく、両者を独立実体として固定していた境界が可動化する。

したがって阿字観を「局所を全体とする」実践と呼ぶ場合、局所が全体を代理し尽くすという意味にしてはならない。正確には、一つの局所において、自己と自己以外が並列的に接続し、その接続から非閉鎖的全体がそのつど現成する。阿字の内部に宇宙が収納されているのではない。阿字、身体、呼吸、意識、世界の関係が、全体を生成する。

ここで体験されるのは、自己が世界全体へ膨張し、それを所有することではない。自己が最初から自己以外の関係内部で生成していたことの身体的気づきである。空海において真言は、人間の恣意的記号だけではなく、心的・物質的・感覚的現象を含む法身の説法として理解される（Hakeda 1972; Kasulis 2005）。阿字観は、言語を世界から切断するのではなく、形と音と身体を通して言語を現実へ再接地する。

この構造は「即」として記述できる。自己即世界とは、自己と世界が同一物であるという判断ではない。異なる両者が媒介距離を失いながら差異を保ち、同じ現在へ現成することである。阿字観は、対象を消すのではなく、対象化によって固定された位相を解除し、局所を再び接続可能にする。

14　生成の位相存在論における定式化

以上の議論から、次の命題を提示できる。

第一に、現実は直列的に持続しながら、並列的に生成する。直列性は継承、因果、責任、行為を可能にし、並列性は異なる位相の接触、偶然、創発、共存在を可能にする。

第二に、矛盾とは、同一条件下の論理的誤謬だけではなく、相互に還元できない位相が同じ現在へ作用する生成的緊張である。論理的矛盾は体系内部で解消されるべきだが、位相的矛盾は関係を切断せずに担われなければならない。

第三に、離散は共通位相内部の差異であり、分散は複数位相の共存在である。離散には共有された問題と局所解が成立する。分散には翻訳と局所的判断は成立するが、全位相を完結させる終局的解はない。

第四に、感性は複数の作用を並列的に受け取り、思考はそれらを直列的に分節する。生成的知は、両者の調和的統合ではなく、感じることと思考することが互いの位相を変化させる非対称的循環である。

第五に、対象化は局所を同定すると同時に、それと整合する自己と世界全体を生成する。知的位相ロックとは、局所的に有効なアウトラインを世界の終局的境界と誤認することである。

第六に、力の局所的凝縮それ自体はフェティッシュではない。フェティシズムとは、その力を生成した関係を忘却し、局所がその力を自己所有するとみなすことである。局所が外部への空席を保持するとき、それは作品性と色気を持つインターフェイスとなる。局所が全体を代理し尽くすとき、それは偶像となる。

第七に、ネオテニーの生成学的意義は、幼児性ではなく、意味と機能を確定しきらない可塑性にある。人間的成熟とは、複数の可能性を保持しながら一つを選んで行為し、行為後も位相変態への開きを失わないことである。

第八に、道具と芸術は、形の物質的同一性を保ちながら、その関係的位相を変化させる能力から分岐する。道具は形を身体的作用へ、芸術は形を不可視で非局所的な関係へ接続するが、両者は実践のなかで重なりうる。

第九に、曼荼羅と阿字観は、局所を全体へ閉じる偶像ではなく、局所から差異を保った全体を現成させるインターフェイスとして解釈できる。

第十に、共存在は、完成した複数者の平和的並置ではない。異なる位相が矛盾を消さず、互いの存在可能性を変えながら、関係を持続する生成的現在である。

15　芸術と現代的実践

現代芸術の課題は、直列的思考を否定して無秩序へ戻ることではない。説明、法、科学、数理が作る局所的安定を保持しながら、それらが排除した自己以外との横方向の接続を再び開くことである。

美学者母のWeb Installationは、画面を閉じた表象面としてではなく、「あちら」と「こちら」、遠隔と身体、記号と現実接地の境界を生成するインターフェイスとして扱う。民宿狭山美学校も、生活を完成作品として展示するのではなく、宿泊者、地域、建物、植物、労働、記憶、オンライン環境が一時的に接触し、自己と場所の位相を変える長期的インスタレーションである。

逆問題芸術は、内容から形を導くのではなく、まずアウトラインまたは接続条件を設計し、その内部で予測不能な内容が生成することを受け入れる。このときアウトラインは対象を固定する境界ではなく、異なる位相を出会わせる暫定的な座である。

芸術が回復するのは、失われた過去の感性そのものではない。生成は不可逆であり、前近代的共同体や宗教的全体性へそのまま回帰することはできない。芸術が生成するのは、現在の記号、制度、技術、身体のなかで、自己以外と再び接続しうる新しい感性である。それは感じることと思考すること、局所と全体、直列と並列、自己と他者が、差を消さずに同じ現在へ作用するための席である。

結論

本論文は、論理的には両立しないものが現実には並列し、隣接し、同じ現在へ作用するという事実を、矛盾の共存在として論じた。現実の力は、矛盾をただ解消することにあるのではない。相互に還元できない位相が、差を保ったまま関係を持続し、その接触から以前には存在しなかった第三の位相を生成することにある。

直列的思考は、この現実を理解、継承、行為へ変える不可欠な力である。しかし、それが唯一の真理形式として絶対化されると、分散した現実は同一位相内の離散へ変換される。言語、法、論理、数理、規範は、現実へのインターフェイスであることを忘れられ、現実そのものとして崇拝される。そのとき一般抽象的普遍性は、関係を失った究極のフェティッシュとなる。

これに対して、感じながら思考し、思考しながら感じる生成的知は、感性と理性を融合させない。両者の差を保ち、その相互変容を引き受ける。ネオテニーは、この未決定性を保持する生物学的条件として限定的に参照できる。枝が枝のまま道具になる位相変態、壁が壁のまま不可視の世界を現前させる洞窟芸術、阿字が一文字のまま身体と世界の関係全体を開く阿字観は、同じ生成原理の異なる実現である。

共存在としての全体は、すべてを一つにする完成体ではない。一つにならないものが、なお同じ現実を生成している非閉鎖的全体である。現代に必要なのは、矛盾を無条件に肯定することではなく、矛盾を生む位相差を読み、必要な判断を行いながら、判断によって自己以外の存在可能性を消し尽くさないことである。

芸術は、この能力を社会の内部に保持する。作品は答えの偶像ではなく、局所から全体への接続を開くインターフェイスである。生成学の課題は、直列性を捨てることでも、並列性を神秘化することでもない。両者が矛盾したまま共存在し、新しい現実を生成できる「現在」を設計することである。

参考文献

Abe, Ryūichi. 1999. The Weaving of Mantra: Kūkai and the Construction of Esoteric Buddhist Discourse. New York: Columbia University Press.

Cassirer, Ernst. 1944. An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture. New Haven, CT: Yale University Press.

DeLoache, Judy S. 2000. “Dual Representation and Young Children’s Use of Scale Models.” Child Development 71 (2): 329–338.

Gibson, James J. 1979. The Ecological Approach to Visual Perception. Boston: Houghton Mifflin.

Hakeda, Yoshito S., trans. 1972. Kūkai: Major Works. New York: Columbia University Press.

Kasulis, Thomas P. 2005. “Kūkai.” In The Stanford Encyclopedia of Philosophy. Stanford University.

Langer, Susanne K. 1953. Feeling and Form: A Theory of Art. New York: Charles Scribner’s Sons.

Malafouris, Lambros. 2013. How Things Shape the Mind: A Theory of Material Engagement. Cambridge, MA: MIT Press.

Merleau-Ponty, Maurice. 1962. Phenomenology of Perception. Translated by Colin Smith. London: Routledge & Kegan Paul.

Somel, Mehmet, Henriette Franz, Zheng Yan, et al. 2009. “Transcriptional Neoteny in the Human Brain.” Proceedings of the National Academy of Sciences 106 (14): 5743–5748. https://doi.org/10.1073/pnas.0900544106.

Tanaka, Tomokazu (美学者母). 2026a. 『生成の位相存在論の公理系』Version 1.0.

———. 2026b. 『自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論』.

———. 2026c. 『人間以前性と自己以前性——生成の位相存在論における自己証明の存在論』.

———. 2026d. 『言語デリバティブ論』Version 1.0.

———. 2026e. 『知の生成論——差・矛盾・力を引き受けるインターフェイス』.

———. 2026f. 『二つの普遍性の生成論——印・型・形・座・席・位・無名性・文化生成を通じた個別具体的普遍性と一般抽象的普遍性の循環』.

———. 2026g. 『空席の力と色気の生成論』.

———. 2026h. 『共存在の生成論——縦軸としての存在、横軸としての共感覚、そして失われた現在』.

———. 2026i. 『共存在と色気の生成論』.

UNESCO World Heritage Centre. n.d. “Prehistoric Sites and Decorated Caves of the Vézère Valley.” Accessed September 19, 2026. https://whc.unesco.org/en/list/85/.

Wadley, Lyn, Tamaryn Hodgskiss, and Michael Grant. 2009. “Implications for Complex Cognition from the Hafting of Tools with Compound Adhesives in the Middle Stone Age, South Africa.” Proceedings of the National Academy of Sciences 106 (24): 9590–9594. https://doi.org/10.1073/pnas.0900957106.

Yamasaki, Taikō. 1988. Shingon: Japanese Esoteric Buddhism. Translated and adapted by Richard and Cynthia Peterson. Boston: Shambhala.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。